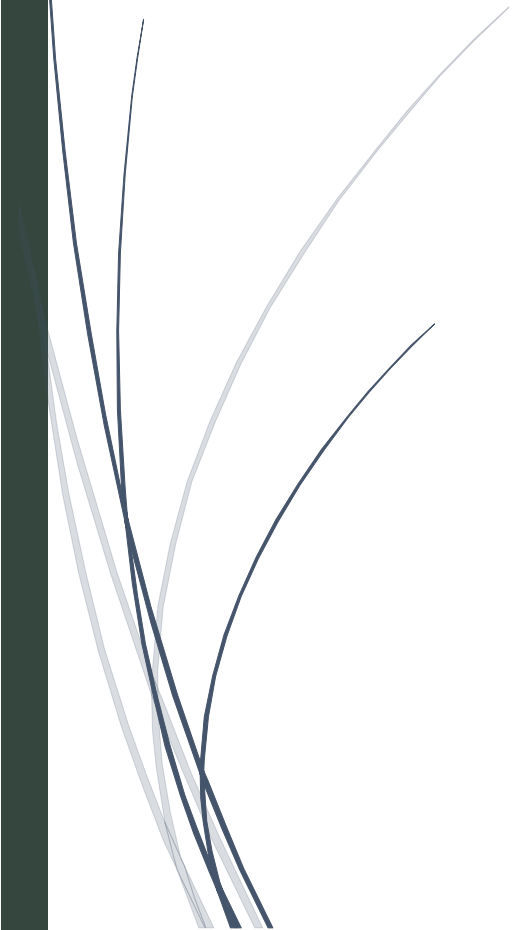


A dark green vertical bar runs down the left side of the page. A dark green arrow points to the right, overlapping the bar, with the text '平成25年度' inside it.

平成25年度

読書会感想文

Several thin, curved lines in dark blue and light grey originate from the bottom left corner and sweep upwards and to the right.

市立竹原書院図書館

平成 25 年度

読 書 会

(原則として、第 4 水曜日、福祉会館 2 階会議室)

開催日時	課題本	著者	出版社
4 月 2 4 日 [水]	こちらあみ子	今村 夏子	筑摩書房
5 月 2 9 日 [水]	鬼の詩	藤本 儀一	新潮社
6 月 2 6 日 [水]	月と蟹	道尾 秀介	文芸春秋社
7 月 2 4 日 [水]	私のおすすめ本		
8 月 2 7 日 [火]	下町ロケット	池井戸 潤	小学館
9 月 2 5 日 [水]	行儀よくしろ	清水 義範	筑摩書房
1 0 月 2 3 日 [水]	ネコと理恵子の奥の細道	山崎 理恵子	藍書房
1 1 月 1 日 [金]	フィールドワーク		
1 2 月 2 5 日 [水]	終わりにき旅	井出 孫六	岩波書店
1 月 2 2 日 [水]	岩に立つ —ある棟梁の半生—	三浦 綾子	講談社
2 月 2 6 日 [水]	ひとひらの舟 樋口一葉の生涯	三枝 和子	人文書院
3 月 2 6 日 [水]	白き瓶	藤沢 周平	文藝春秋

◆ 4月課題本 ◆

『こちらあみ子』

今村 夏子／著 筑摩書房

読書会では自分の感じた事を自由に話すことができます。でも、それだけではありません。出席者の話されることを聞くと、気づかなかったことや、異なる視点を知って、自分の考えが膨らんで来ます。

この『こちらあみ子』も語り合ううちに、作品の内包している生きることの重たさに正面から向き合うようになりました。何の計算もなく自分をさらけ出してしまう「あみ子」と、同所収の『ピクニック』に出てくる偽りで塗り固めた「七瀬」さんが、貨幣の表裏のような存在だというのは、読書会が導いた仮説です。

どんな立場で自分が周囲を見ているのか、正義や善を判断する自分の立ち位置を点検できる読書会でした。



みんなそれぞれの自分を発信したいのではないだろうか。あみ子のように周囲へのこだわりもなく自分自身を素直にぶつけたいと思うが、ままならないことの多い世の中です。素直に生きようとすればするほど住みづらくなります。でも「あみ子」を認め、受け入れているものの存在も確かにある。

それぞれを丸ごと認め、「みんなちがって みんないい」と生きていける社会が実現できるように私のできることをするしかないと思いました。



あみ子は自分が普通とはちょっと違うことを知っている。話しても、あみ子には理解ができないだろうと、だれもきちんと説明してくれない。しかしあみ子は誰よりも真剣に向きあってほしかったのだろう。P114「教えてほしい」という、あみ子の言葉は、自分の存在すべてをかけた、魂からの言葉のように思えた。

さらりと読めるが、読書会で話しあっていると、この本の奥深さが見えてくる。一人で読んでいたら、絶対にわからなかった。

◆ 5月課題本 ◆

『鬼の詩』

藤本 義一／著 河出書房新社

鬼を見たこと握手したこともないのに、鬼は身近に居るような気がする。物語や説話の中でであってきているからかもしれない。例会でも「鬼」のつく言葉や成句がいくつもあがってきた。「鬼のいぬまの洗濯”って、今は譬喩として使うのは古いですね」とか。

その中で「鬼の目にも涙」という成句から本題に入った。これはつまり、鬼は本来、涙(=感情)とは無縁の存在である、という前提があるから言えることだろう。「非情である鬼」その鬼に涙という「有情のもの」が付くことで齟齬をうむ。詩も「有情」だと思う。『鬼の詩』の主人公は、実在の二代目桂米喬をモデルとした落語家である。新しさを追い求め、人気に翻弄^{ほんろう}された芸人の一生は「喬」が「狂」でもおかしくない。鬼にも形容される凄まじい生涯なのに、作者は、妻や主人公の「有情」を文中に溶かし込んだ。

＜滑稽の裏に、常に人間の哀しさが棲んでいる＞。鬼の裏に棲む哀しさを「詩」と言うとき、鬼の涙が見える。それは、常人の涙と何も違うことはないのだ。



「芸人は下に落ちる」と評価されることを承知のうえ、恩返しのため養父

の意志をついで、芸の道に入り、頂点に上り詰めるために、自身の生命を捨ててしまうような、想像を絶する執念で芸に取り組んでいるが、そのウラには人間の悲しさがひそんでいることを痛切に感じた。意見交換時に、「鬼の詩」に流れているものは「無情」(鬼)と「有情」(死)の物語として作られたものであると説明を受け、芸人魂には一般人では考えもおよばない世界観があることを改めて認識した。



馬喬さんは養父の若き日の夢だった落語の道に進み、又、妻子に恵まれていたが、芸の事になると異常とも言える気魄こもった精神力で試行錯誤しながら、自分独特の芸に打ち込み、人気が落ちても病に倒れてもそれを芸のこやしに、敢えて苦難の道を歩み窮極の芸をきわめた人、読んで少しもみじめさとかしめっぽさを感じなかった。これこそ芸のよい鬼であり、人生が詩だと思う。



「鬼の詩」 人それぞれにドラマあり メンバーのよし よき師 囲みて

読書会 個性のままに とうとうと 言いたきことが 言えて発散

生きざまも 年の差もあるメンバーが 心ひとつに ストレス解消



芸人になる前から馬喬の中にはもう鬼が住んでいたように思いました。墮ちてはいはいあがりの繰り返しは芸人という仮面をつけた鬼が悪い方へばかり引っ張っていると感じました。



「おにばばとはいってもおにじじとは言わないね。」「鬼の居ぬ間の洗濯は本当の洗濯じゃなくほっとする、心の洗濯のこと。」「元気な人が風邪をひくと鬼の霍乱と揶揄するよね。」などと誰もが口にしたことのある「鬼」の付く言葉をあげてみました。そして日本の「鬼」は神代において「カミ」として存在していたと「鬼」の歴史性まで深めていくことができました。ではと講師の先生から、「鬼の目にも涙」はどう考えるかと、問いかけられ自然に本の世界に入っていました。

この本の主人公の桂馬喬は、落語という話芸の世界で「鬼」になっていくのですが、客が満足するために、そこまで自虐的でなければならないのかと、痛々しさを感じました。同時に受け手側(客)の加虐性は現代にもあると感じました。おどろおどろしい「鬼」を馬喬の生きざまに重ねながら、なおも「鬼とは孤独なものである。」……『泣いた赤おに』から「鬼・おに・オニ」にこだわっていた私には、多様な読取りを交換出来ました。そして、読書会の課題本でなかったら絶対手にしないだろう本を読むことで本の世界の広がる「読書会」に今日も感謝しました。「文我に近付けば近付くほど、馬喬の本来の芸は遠ざかっていく。本人にはわからなかった。」(新潮単行本 p21 より)この本の心に残った一文です。

◆ 6 月課題本 ◆

『月と蟹』

道尾 秀介／著 文芸春秋

「蟹」という字を見ると、いくつかの蟹の光景が目に浮かぶ。北海道や下関で何種類ものおいしい蟹が並ぶ広い市場、そして、テレビで見た浜辺の子蟹の群れ。だが、今回のテキストに出てくる「蟹」は、そんな予想とは全く違って「やどかり」だった。分類上は、蟹とも海老とも違うらしいが、子どもの頃に出遇ったきりで、最近は目にする機会がない。

海辺近くに住む人から、蟹の話を聞きながらの読書会開始となった。そして、会話を盛り上げたのは、図書館が用意された資料である。竹原書院図書館では、読書会担当の職員を配置され、毎回きちんと読んで関連すると思われる資料を会場に展示されるほか、会の途中でもレファレンスに応じて下さる。今回も、そのおかげでどれ程深まったことか。

主人公達は5年生。自分の周囲の大人社会が全く見えていない幼子ではなく、かといって、大人を知ったような気になっている 6 年生でもない年齢として設定されている。しかし、どうであれ、子どもは大人の生活に巻き込まれる。ぶよぶよした下半身を、他の巻き貝の抜け殻を借りて守る「やどかり」は、大人の中で暮らす子どもの似姿かもしれない。

この「やどかり」の本体を殻から出すために、登場する 3 人が「やどかり」の殻の底をあぶるが、科学研究目的でもあぶるしかないという資料から知って、仲間内でも一瞬どよめいた。大人から見れば、必要もない残酷な行為と

受け取られることだが、それをする 3 人には、言葉にならぬ必然性があっただろう。それを作者は、周囲の大人の動静を描きながら、彼らが「やどかり」を「ヤドカミ様」に仕立て、それぞれの怒りや嫉妬、痛みにも色づいた願いをかける儀式にしていく過程を具に述べて行く。

彼らは言う〈なんでうまくいかへんのやろ〉。子どもでも大人でも誰でもが持つ生きることの不条理。その嘆きに、少しずつ直面していく10才の子ども達。

“うまくいかへん”ことばかりの中を、ここまで生かされてきた大人として、何を語れるか。読書会で、「月」を様々に読み解く意見が交わされた。それを聞いていると、読書会の参加者は、どんなに“うまくいかへん”でも、道はあるからこそ、ここにいるのだと思っているのだと感じた。



青春時代というには早いが、おれに少し片足を踏み入れた少年少女の物語です。

心の中に人には話せない不安や悲しさ、寂しさ、暴力を振るう親との理不尽な生活、等のもやもやした悩みを抱えながら、惹かれあい親しくなっていく子供たち。お互いに嫉妬しながらもそっとかばい合い、自分の落ち着ける場所であるこの関係を守るためにはわざと驚くような危険なこともしでかすなど、いろいろなことがあるのですが、最後はヤドカリが成長するに従って大きな殻に住み替えるように、少し成長した子供たちもそれぞれ新しい自分の居場所を見つけたように思えます。しかし、助けてくれる人がいない中で現状を乗り越えるのに、自分の力を補う為、刃物を使わざるをえなかった少年のその後が心配です。



学校内で孤立した小学生3人が秘密の場所に集まり、いろいろな願い事を「ヤドカリ」を介して行うという物語であるが、読む過程において結果を求めようとした①ヤドカリをライターの火であぶるという残酷な行動の背景は？ ②嫌がらせ手紙を発信した理由は？ 等々に対し、すっきりしないままで物語が終わっているので、読者自身で結論を導き出す展開でいいのだろうか、不完全燃焼の状態で本を閉じた。



ヤドカリの大きな爪(?)が左側が大きいものを「ホンヤドカリ」、右側が大きいものが「ヤドカリ」。おいしく頂くタラバガニは、「カニ」の仲間ではなくヤドカリが進化したもの？ 等々……本から本へ繋がり、生物についても興味関心のまどをひろげることができた。海辺に育つ子供ならではの、磯の生き物とのあそびのひとつが、「ヤドカリを殻の中から出す」ことであった。殻のとがった方を下にして火であぶると殻からヤドカリがするりと出てくる——『ヤドカリ』の科学絵本にも殻から出す方法として紹介されていた。——このことは、まさにこの小説の主人公、慎一と春也そして鳴海の間には、意味のある「あそび」となる。海辺の生活経験のない私には、夏休みに親に連れられて行った海水浴でしか見ることのなかったヤドカリ。それにかわる遊びは、カエルやトンボに糸をつけてとばす……といったことだろうか。ヤドカリは甲殻類としては、カニと同列だが、細分するとカニ(crab)とは科・目は違っている。でもこの作品の蟹は「ヤドカリ」でなければならなかった。ただ脱皮して大きくなるだけでなくわが身のどろどろとした部分を隠す、あるいは本当の自分の居場所としての殻をもつ「ヤドカリ」でなければなら

いと思った。

それぞれの子供にかぶさる不条理をどう購うこともできない5年生・10歳という学齢期の子供を主人公としているのも現代社会の課題をついている。

現実には(慎一・春也・鳴海)のような重荷を背負った子ども(正しくは背負わされた子供)が増えているとも感じる。そして、祖父・昭三のように良きことも悪きこともまるごとで、子どもを受け止めてやれる大人が少なくなっている。月と海のもつ神秘性をバックにその前で流されていくそれぞれの人生……やどかりを「ヤドガミさま」と見取ることが、彼らの救いだったのだろう。風の音や雲の流れ、波の音を感じさせそのことから非現実の世界へひきこむ表現方法は、ちょっとした「大人の童話」のように感じられた。残酷なことが起こっている(やっている)のではあるが、さらっとながれていくことから「大人の童話」と感想を持った。

科学や民俗学など広範な知識を呼び起こした作品に出会えた。子どもたちの世界は、残酷さもあわせもっているけれど、ピュアーでなければならぬと強く感じた。

◆ 7月 ◆

私の読んだ本

「持ち寄り本の“披露宴”」

毎月の読書会は、1冊の本を課題本に決めて、参加者は同じ本を読んで集まります。そして それをツールとして、自分の心の反応を語る形をとっていますが、7月は、課題本を設定しないで、それぞれが最近(10年前から気にかかっているのも“最近”)刺激を受けた本を持ち寄って語り合いました。

途中でお茶とお菓子(これも 持ち寄り)を頂きながらの本の“披露宴”です。本特有の「つながる本」を呼び寄せたり、レファレンスをお願いしたり、話題になった本の数は相当なものになりました。



私の読んだ本

枠内は TRCMARC 内容紹介より

『等伯』

安部 龍太郎／著 日本経済新聞出版社

養父母の非業の死により、故郷・能登を追われ上洛し、戦の只中へ。物事の本質を求める絵師の性と荒ぶる武家の血が苦難の道を歩ませることに…。長谷川等伯の生涯を骨太に描く。

『海賊とよばれた男』

百田 尚樹／著 講談社

敗戦の夏、国岡鐵造は借金以外なにもかも失っていた。20世紀の産業を興し、戦争の火種となった巨大エネルギー・石油。その石油を武器に変えて世界と闘った男とはいったい何者か。実在の人物をモデルにした歴史経済小説。

『一路』

浅田 次郎／著 中央公論新社

いざ、江戸見参の道中へ。小野寺一路、19歳。父の不慮の死を受け、御供頭を継いだ若者は、家伝の「行軍録」を唯一の手がかりに、江戸への参勤交代を差配する。

『エンジェルフライト 国際霊柩送還士』

佐々 涼子／著 集英社

異国で客死した遺体を家族の元へ送り届けるのが国際霊柩送還士の仕事。日本初の国際霊柩送還の専門会社で働く人々と遺族への取材を通し、人が人を弔うことの意味を見つめる。

国際霊柩送還士の仕事とは、遺族が、きちんと亡くなった人に向き合って存分に泣くことができるように最後にたった一度「さよさら」を言うための機会を用意する仕事。エンバーミング（防腐処理）をして、海外で亡くなった人を生まれた所に連れて帰る大変な仕事をする人。今まで考えもしなかったことをこの本を読んで知った。

『両手を奪われても シエラレオネの少女マリアトゥ』

マリアトゥ・カマラ、スーザン・マクリーランド／共著 汐文社

20世紀におけるもっとも残酷な戦争のひとつである、シエラレオネ内戦の犠牲者となった12歳の少女マリアトゥ。子ども時代だけでなく、両手までも奪われた少女が、どのように生き延び、人生を再スタートさせたかを綴る。

私には、両手がない、でも声がある。激しい内戦によって、難民となった12才の少女がユニセフ特別代表として世界に声を上げるまでに告白したノンフィクション。世界にはいろんな国がありいろんな子供がいるが、自分の国の内情を子供ながら外国の人々に伝える勇気ある行動に心打たれる本です。

『舟を編む』

三浦 しをん 光文社

辞書編集部に異動した馬締は「大渡海」の編纂を始める。個性的すぎる仲間たち、問題山積みの編集部、ままならぬ恋…。愛すべき変人たちが恋に仕事に右往左往。「大渡海」は編み上がるのか? 『CLASSY.』連載を書籍化。

2012年本屋大賞 辞書を作ることを舟にたとえ「海を渡るにふさわしい舟を編む」苦労をしながら辞書を作り上げていく様をいろんな面からこれでもかと思う程の言葉で伝えられて、みんなに読まれるのもわかります。

『海からの贈物』

リンドバーグ夫人／〔著〕吉田 健一／訳 新潮社

「私はやどかりになりたい。背負ったものをさっぱり捨てたい。」有名飛行家の妻として、そして自らも女性飛行家の草分けとして活躍した著者が、離島に滞在し、女の幸せについて考える。

『花のれん』 山崎豊子全作品 1

山崎 豊子／著 新潮社

大阪の街中へわたの花のれんを幾つも幾つも仕掛けたいのや——細腕一本でみごとな寄席を作りあげた浪花女のだ根性の生涯を描く。

『西の魔女が死んだ』

梨木 香歩／著 小学館

中学校へ行けないまいは、祖母のもとで「魔女修行」をすることになった。それは、何でも自分で決めるということ…。児童文学者協会新人賞などを受賞した、生きる力を与えてくれる癒しの児童文学。

『ことり』

小川 洋子／著 朝日新聞出版

図書館司書との淡い恋、鈴虫を小箱に入れて歩く老人、文鳥の耳飾りの少女との出会い…。世の片隅で小鳥のさえずりにじっと耳を澄ます兄弟の一生を描く、やさしく切ない長編小説。

弟にしかわからない、小鳥のさえずりのような言葉を話す兄と、「小鳥の小父さん」と呼ばれる弟の物語。

兄弟の生き方は、一見孤独にも不幸にも見える。しかし読み終わった時、何だか私は小鳥の小父さんの生き方が羨ましく思えた。

閉じられた世界に生きる兄弟たちの内なる世界の奥深さ、豊かさにぐいぐい引き込まれていく。

小川洋子ワールド全開で、独特な静謐さを漂わせている作品。

『なるほど知図帳日本』

旺文社

日本の最新情報を徹底調査！ 日本地図とともに政治・社会、産業・交通、歴史・風習、自然などのテーマを基本から解説。

『なるほど知図帳世界』

旺文社

世界の最新情報を徹底調査！ 世界地図とともに国際情勢、産業経済、社会生活、歴史・文化・スポーツ、世界遺産などのテーマを基本から解説。

『永遠の0』

百田 尚樹／著 太田出版

生への執着を臆面もなく口にし、仲間からさげすまれたゼロ戦パイロット。「生きて帰る」という妻との約束にこだわり続けた男は、なぜ特攻を志願したのか？ はるかなる時を超えて結実した、苛酷にして清冽なる愛の物語。

『真夏の方程式』

東野 圭吾／著 文芸春秋

夏休みを伯母一家が経営する旅館で過ごすことになった少年・恭平。仕事で訪れた湯川も、その宿に滞在する。翌朝、もう1人の宿泊客で元刑事の男が、変死体で見つかり…。ガリレオシリーズ長編。

『蝸ノ記』

葉室 麟／著 祥伝社

羽根藩の壇野庄三郎は幽閉中の元郡奉行・戸田秋谷の元へ遣わされる。秋谷は不義密通の罪で家譜編纂と10年後の切腹を命じられていた。当時の事件の真相探求を命じられた庄三郎は…。

今月は課題本での読書会ではなく、参加者一人一人が自分の「心の本棚」にある本をブックトークしました。自分の「心の本棚」を話すのは少し抵抗感も持つのですが、ブックトークを受け止めてくださるみなさんと、講師の先生が本と本そして、本と人を紡いでくださり心の満足感を得ることが出来ました。

私の紹介本は、先月が直木賞の本でしたので、一冊は直木賞繋ぎりの『蝸ノ記』を紹介しました。先月が『月と蟹』を読むための科学本をリファレンスしてもらいましたので、もう1冊は、かがく絵本の『えぞまつ』を披露しました。『えぞまつ』は、かがく絵本と分類してありますが、内容はおおいに文学的な本だと思います。えぞまつの森をとおして自然の広大さと永遠に続く「いのち」がテーマになっています。

自分の読んだことのある本が紹介されると、どんなふうに使われたのかその人と話してみたいくなります。本が本を呼び、本を通して「人」との繋がりがひろがる読書会で、豊かな時を過ごしました。

『下山の思想』

五木 寛之／著 幻冬舎

敗戦から見事に登頂を果たした今こそ、実り多き「下山」を思い描くべきではないか。諦めの行動でなく新たな山頂に登る前のプロセスとして「下山の思想」を説き、未曾有の時代にどう生きていくか、究極のヒントを示す。

『財政学』

神野直彦／著 有斐閣

政治・経済・社会を統合する媒介環として財政をとらえ、総合的な社会科学としての財政学の構築をめざす体系的テキスト。財政投融资などの制度変更を反映するほか、データ更新、格差問題など新規のトピックスを盛り込む。

『女盗賊プーラン』

プーラン・デビ／著 武者 圭子／訳 草思社

インドの極貧の村に低カーストとして生まれ、わずか11歳で結婚させられた少女プーラン。虐待の末に婚家を追い出された彼女を待ち受けていたのは、村八分、白昼のレイプ、犬以下の扱い。ある日盗賊団に誘拐され…。

カーストに生まれ、11才で結婚させられ虐待の限りを受けるが、女盗賊となり復讐していく。投降し、国会議員となり同じようにつらい目に合っている人達が救済されることを願って自らの半生を語った本。彼女は私より8才年下。この近い時代にインドでまだこの様に生きている人達がいるということが驚きであったし、彼女の生き抜く姿に何度も涙があふれた。人間の命の価値は同じであり尊厳をもっている。

◆ 8 月課題本 ◆

『下町ロケット』

池井戸 潤／著 小学館

視聴率40 パーセントを超す話題沸騰のテレビドラマ『半沢直樹』と作者は同じ。『半沢直樹』は『オレたちバブル入行組』『オレたち花のバブル組』（文芸春秋社）の2冊が原作だそうです。この『下町ロケット』もドラマ化されています。

夏の暑さにゆで上がりそうな時期に読むには相応しい痛快さでした。主人公は、エンジンを作る下町の中小企業の社長ですが、大企業からいじめられ我慢を強いられます。が、技術と知恵で大企業を降参させて報われるのですから安心です。テンポは速いし、夢も希望も語られ、プライドを大事する社長に感情移入しても足をすくわれることはありません。この安定感は、『半沢直樹』とも共通しています。同じテレビドラマの『水戸黄門』みたいだと言う人もあります。「この紋所が目に入らぬか」というセリフで溜飲が下がるところが同じでしょうが、黄門さまに感情移入すればこそ溜飲が下がるのであって、悪家老の家来であるばっかりにバツバツと斬り殺される身に成り代われば、痛快どころではありません。しかし、それを考える暇もなく筋は進行するので、黄門さまになりきって安心(?)なのです。

こう考えると「痛快さ」とは何でしょうか。

『下町ロケット』の作品を支えているのは、主人公の技術力とプライド、仲間の存在でしょう。人はプライドをいかにして持つかということから、学校

教育の「自尊感情を養う」という教育目標が話題になり、あれこれ話が出ましたが、なかなか「自尊」の説明が付きませんでした。

男性の参加者から、「普通にある世界だと思う」と発言がありました。いかにもありそうな状況を仕立てていますが、実際にはそうはいかないだろうという展開にしておいて、随所で「そう言いたかったのだ！」と痛快さを感じさせます。「大企業はこんなに悪者ではない」という発言もあったように、善玉悪玉がはっきりしているのも特徴と言えましょう。こういう組み立てがあって、虚構らしからぬ高揚感を持たせるうまさを、暑い時期でも楽しめました。



～プライドをもつ～

「倍返し！」の言葉を流行らせ、子ども達のあいだには、鞆を持って走ることを「半沢走り」と呼び合っているとか……マスメディアの力とはなんともかとも。

そのドラマの原作者、池井戸潤さんの『下町ロケット』が今月の課題本だった。奇しくも今日27日は国産ロケット『イプシロン』の発射の日。13時45分は、読書会が始まっていたのでその瞬間を見ることはできなかったのだが、何らかのトラブルで発射延期となった。ギリギリのところでも不備があれば計画を止める決断力の速さもたいしたものであると思った。結果として失敗(?)であっても中止する潔さを妙に納得できる。それこそが、研究者や技術者の「プライド」に裏付けされた「信頼と自信」ではないだろうか。

佃は失敗はしたが自分が関わり開発した「バルブ」が宇宙開発のための鍵をにぎっていることにプライドを持っていた。もちろん反対に研究者特

有の「あまさ」から会社経営はうまくいかなかった。しかしその「あまさ」(＝傷)にしっかりと塩を摺り込む殿村の存在が佃と佃の会社をすくった。「ものづくり」にプライドをもった職人と呼ばれる人の存在も忘れてはならない。

今月の読書会は、伝統の技をもった職人とよばれる人達がその権利を取り戻し新たな歩みをはじめていると確信できた「本と日常」であった。この本から奥山清行の『伝統の逆襲』を再読したいと思った。

◆ 9月課題本 ◆

『行儀よくしろ。』

清水 義範／著 筑摩書房

清水義範氏に「行儀よくしろ。」と叱られてしまった。だいたい叱られる内容は、身に覚えがあつて、「すみません」と謝るのではあるけれど、身に覚えがあつても、見ず知らずの清水氏から叱られると、「あなたにいつ会いましたっけ？」と内心減らず口が鎌首をもたげる。これが浅ましい根性なのだろうかと、もたげかけた鎌首を押さえる。

この本の題名を初めて目にしたとき「行儀よろしく」と読んでしまった。だから、高所から叱られるというより、著者も読者も横一列に並んでいて「お互い考えてみようね」ということかなと思い、そのやわらかな謙虚さに期待した経緯がある。文字の並び方が違うというだけで、想像する世界がまるで違うから、言葉はおもしろいものだ。

〈文化の伝承という教育〉が〈今の日本にあるか〉という問いが中心となる内容だと読んだが、頷けるところも頷けないところもあって、〈文化〉〈伝承〉〈教育〉をどうとらえるかということは、議論の必要があると思う。

例会で盛り上がったのは、文化としての「言葉」についての意見交換だった。〈生活の文化を伝えていく〉という著者の言葉に乗れば、生活は変化し、言葉も同様に変化するということになる。たまたま、例会日の朝刊は、日常使われている国語の変化を発表した文化庁の「2012年国語に関する世論調査」についての記事が1面に載っていた。参加者からも言葉の著

しい変化に驚いた例がいくつも出されて、「この言い方は間違いだ」とか「これが正しい」とか言えない日常の変化を身にしみて感じている表情が見えた。

行儀とは、〈ひとの目を意識した節度あるふるまい〉と著者は定義する。〈ひとの目〉というのがこれまた難題で、参加者からは、「そこに含まれる誠実さ」「他のひとへの敬意」「その人の自己抑制」などという解釈が語られた。

「行儀よくしろ。」と言われると、「はい」と一応言うしかないが、内容をどう解釈するかを語り合って、自己点検・社会点検の資にしようとする読書会を、大切にしたい集まりだなあとあらためて感じた。



～次世代の人材を育てることについて～

「行儀」の意味を辞書で調べてみた。

『行』は行往坐臥の行で歩み行くことが原義のサンスクリット語 gamana の漢訳。『儀』は規則や法則の意味。元仏教語で修行や実践に関する規則、仏教儀式を意味する。そこから作法にかなった立ち振る舞いをいうようになった。」とあった。著者、清水義範氏は、「教育をよくする」ものは、「社会による次世代の教育」と位置付けて、現在の問題点と大人がどう行動することが 必要なのかを自らの視点で意見を述べている。

まず「学力」といえば点数で表されたものが全てのように言われ点数が向上するような学校立て直しが進められている。戦後、価値観が大きく変わり「学力」の意味も変わっていった。氏が説くのは、日本の生活文化を伝承していくことこそが優先されるべきだと説く。例えば、敬語等ことばの文化の中にも教育改善の課題があると説明している。はからずも本日、表現

方法の変遷の記事が新聞に掲載されていた。生活習慣の違いから仕方のないものと思うものもありはする。しかし、そのことばのもつ意味あいであったり、相手を慮ってのことばの遣い方を違えることは日本のよき習慣を壊していくものにほかならないと、氏の考えには同感である。

また、「本を読む」ことへの警鐘は実感するばかり。本はなくても高価なゲーム機(器かな)やそれにともなうゲームCD等はふんだんに確保されている。「本はなくてもiPadでダウンロードしたものを読めばいい。」……器械が選んでくれたものを読むのである。なんとも合点がいかぬ話。本を選択するすべを伝えられていないのだから無理からぬこと。生活文化の違いがもたらした問題のひとつである。

そして、教育のグローバル化を図るとして英語教育を導入した結果もたらされたのは、国語力の低下ではないだろうか。一つをつつけば、どこへでも連鎖していく。どこからでもいい、意識のある大人が動かなければ日本の将来は危機的状況にある。市井の「普通の人」の力が、今こそ必要な時はないと考える。一つの行動が、水紋のように外へ外へと広がっていく社会による次世代教育が必要です。

竹原読書会『竹の音』の感想文や活動の広報は、まさに社会教育の一役をになっているのではないだろうか。



マナー、家庭教育、家族、それぞれの役割が崩れてきている。子供の食事のマナー、日本文化の崩れ。それは子供の学校の成績が良いとか悪いとかいうことよりもはるかに大きな問題である。大人が今ここで、文化性の教育を考えないと、この国はどうしようもなくなってしまうだろう。子供の時に基本的行儀のよさを身につけておくことが重要。まず親が、大人が自

信を持って生きて、子供に手本となる姿を見せる。文化の崩れを修復していくことが、今日本の教育にいちばん大切であると信じている。



周りの大人達(親、隣近所、教師)は子供達に対し、「知育」「体育」「徳育」の項目に基づいた教育指導を行っている。しかし大人達の「子供に不自由な思いをさせたくない」という思いから「一流大学に進める人生目標」により、偏差値教育の流れとなり「勝ち組、負け組」に分けられ、結果、家族像の崩壊を引き起こしてしまい、子供たちは孤独な状況に追い込まれ「我慢する力の欠如」「言葉使いの乱れ」等が現れている。読書会において「美しい日本文化の沈没」という危機が目の前に押し寄せてきているのではないかと、意見交換が行われ、改めて大人社会の責任の重さを痛感させられた。

自分自身の時間はあまり残されていないが、「行儀よくしろ」と自分に言い聞かせて、次世代を担う子供達に形あるものを残すべく努力して行きたい。



皆さんご存知でしたか？(知らなかったのは、私とごく一部の人達？)
九月二十五日の読書会での出来事。

本の扉を開けると、内容に関したものの、暗示したものがあることが多々
九月の課題本の「行儀よくしろ」清水義範著、内容は私にとってはイマイチ(竹原なので…)

扉に□が4つ並んだマークと共に、ちくま書房421とあるではありません

か。

私はこれに引っかかり、(いつもはそんなにイギがましい女ではありません) 読書会で発言。話は展開し調べた結果「ちくまの新書」はすべて四つの角。なぜ ○△ではいけないの？

結論 見た目が落ち着くからではとなりました。421は通し番号。仮に書名を言わなくても番号を言えば本が買える。フムフム！この件で読書会は大もりあがり たったこれだけのことで理由があるのです。

これを知っただけでも本日の読書会に参加した収穫あり、面白い！ですよ！皆さんも参加されては～

◆ 10月課題本 ◆

『ネコと理恵子の奥の細道』

山崎 理恵子／著 藍書房

松尾芭蕉のたどった道を、曾良の代わりにネコを連れて歩いた道中記なのかと思って読み始めた。たしかに、全編ネコ(名前はネネ)が居て、それなりの働きをしているが、奥の細道の行脚跡をそのままたどる旅の話ではなかった。

ネコを飼った事のある人には、ネコの性質がおわかりだったようだが、縁遠い者にとっては、犬との道中記とどう違うかが、詳しくは解らない。

絵を描く作者だから、芭蕉の歩いた道を絵にしながら歩いただろうと思うが、この作者の絵を見たことがないから、画家としての彼女が見えないのは残念なことだ。とすると、文章として読むしかないのだが、まとめると「芭蕉に惹かれている」と書きたかったようだ。〈芭蕉のような生き方をしたいと、すべての縁を絶ちきって飛び込んだ〉と書かれている。芭蕉が、地位や名誉を捨てて求めた俳諧の道が、彼女のしがらみを捨てて飛び込んだという絵の道に通じているのであろうか。参加者からは、彼女の自由奔放さ、一途さ、自己への忠実さ、などが感想として語られたが、どうも追いつきにくい生活ぶりを感じる言葉が多かった。

芭蕉は、500年前の西行が求めた「道」に誘われて旅をしている。西行が何を求め、芭蕉が西行の求めた道をどう見たかということが、この作者のテーマのはずだが、それをこの作者は語り尽くしていないと思う。芭蕉や

西行が世俗的な欲を捨ててまで求めた「執着しない心」について、作者の「自由」の解釈を聞きたい。

例会途中で、〈旅に病んで夢は枯れ野をかけ廻る〉という芭蕉の句に出てくる〈夢〉の中身について、新しい？ 仮説を披露された方があった。それに一同アングリしたのも、読書会ならではの楽しさだった。W大の先生の説だそうだが、あの〈夢〉は、食客としてどこかに召し抱えられ安定した暮らしを夢みたのだというものだ。ハァー、フーン、ヘェー……。その先生は、俳諧研究の専門家だそうである。研究というのはおもしろいものだ。素人考えでは、そういう夢なら、〈枯れ野〉より屋敷町をかけ廻らないと実現しないだろうに、などとツッコミをいれながら楽しんだ。

画家としては、広島にも縁が深いようで、毎年8月6日、広島市の原爆ドームの前で訪れる人たちと共同で大きな絵を描いておられるそうである。この方の絵を見たいというのが閉会の言葉であった。



芭蕉にあこがれ、奥の細道をたどるため、いさぎよく無一物になり突進する。何と強い人だろう。細道を行脚しながら、ネネを連れて絵を描き、「奥の細道の挿絵を描くのではなく、芭蕉の心の生き方を、芸術のエネルギーを絵で表現したかった。」とあるが、厳しい状態の中で、何かにつかれたように描いた絵はどんな絵だろうか。芭蕉の姿がだんだん遠くなった様な気がします。



芭蕉の生き方にひかれて、おす猫ネネと美術教師を退職して、奥の細道に旅立つ。句がつかれないから、代わりに油絵を旅先で描き、子供たちに絵と書を教え、人間関係にわずらわされると逃れるように絵を描きにでかける。ネネの死、7年間の作品はネネを同行して、出来上がった。ネネの死を通して思うことは、人生とは本当にカナシクテ、ツライモノだと思う。

◆ 11月 ◆

フィールドワーク 宮島

～ 第一章 ～

11月の読書会は、座学ではなく、現地での学習でした。見学地は「宮島」。四年前の課題本だった『満身これ学究』吉村克己／著(文藝春秋)以来の興味ある地です。

「宮島」と聞けば様々のことが浮かびます。「平家物語」「平家納経」「幽玄の世界の能舞台」等々。今回のフィールドワークは、本で得た知識をその地に行って確認するまさに「大人の社会科見学」でした。

8時過ぎ、図書館に集まり貸切バスで宮島に向かいました。毎月の読書会の講師である吉川先生にも同行して頂きました。

今回のフィールドワークでは、吉川先生のお世話で、厳島神社の宮司様のお話を聴くことができました。そして、おそらく普段の参拝では入ることのない、神社の事務所に通されました。そこで厳島神社に伝わる能に関する事、「神道とは」と広範な内容を丁寧にお話ししてくださいました。その後「千畳敷」に上り、お昼は参加者みんなで宮島名物の「あなご重」を頂きました。

午後は、現地ガイドさんの説明を受けながら、神社の回廊を巡り、資料館では『平家納経(レプリカ)』を鑑賞しました。

宮島での最後の時間は、これも名物のもみじまんじゅうと暖かいお茶を頂き、船に乗りました。

そして、書物から得た知を実際の地で再確認した充実感と、同好のみなさんと美味しいものを頂き至福の時を共有できた感謝の気持ちで家路につきました。

～ 第二章 ～

『満身これ学究』吉村克己／著(文藝春秋)を読んで以来の念願だった宮島での野外教室が実現しました。当日は吉川先生のご紹介で厳島神社の宮司さんに日本の神様とは、神道とは、のお話も伺うことができました。日本の神道は自然宗教であり、森羅万象に神が宿る。何をもって神道とするのかは明確ではない。日本人が自然観や価値観、感性に基づいて時間をかけて生み出した信仰で、経典、開祖を持たず、日本人の生活、文化、言動の様式などに影響を及ぼし続け、遺伝子となって、今も我々の血肉の中で生きている。山、海、川、泉、谷、森、巨岩等々すべてに神が宿るとして信仰され、人はそれらの神の懷で暮らしているとのこと説明でした。ものみな全て神が作り出したものではなく、神が生み出したものであるとのことでした。

考えてみれば、境内に入った時に澄んだ空気を感じ、一年の初めの正月から始まる年中行事も、誕生から始まる人生儀礼なども、何の疑問もなく行われ、深く生活に係わりを持っています。この度お話を伺うことで改めて、当たり前と思っていた事柄は、私のDNAに刷り込まれ、それが神道だと再確認した収穫の多い野外教室でした。

～ 第三章 ～

12月の読書会に行きますと、参考資料として机の上に能面に関する本も数冊置いてありました。今日の課題本に能面が出てくることはないのに・・・と思っていましたが訳があったのです。今回の読書会でまさか能面の本を読むなんてと思いましたが、これも11月の宮島フィールドワークから発展したことでした。(私は、宮島行を欠席していました)

厳島神社に有名な能面があるそうです。その話を宮司さんから聞いて、興味津々だった参加者に応えて、図書館が翌月の例会に能面の参考資料を並べられたものでした。欠席だった私も、こうして宮島の話を共有し、「読書会」とはこんなに無限大の広がりを作っていくものと痛感しました。

『能面の世界』西野春雄／監修(平凡社)の中から一例をあげますと、女面の見分け方。毛描によって見分けるのが最も簡単だそうです。「小面」は、頭頂部分け目から平行に三本、頬にかけて緩やかに太くなる。とか・・・その他色々とても面白いものでした。

能は知っていましたが、能面の世界にも一歩(いや10cm位)入った気がしました。

「本は面白い!」「本はつながっている!」皆さんも一度読書会を覗いて見て下さい。

毎月、第四水曜日の午後に集まっています。

◆ 1 2 月課題本 ◆

『終わりのなき旅』

井出 孫六／著 岩波書店

日本帝国国民が日の丸を振って大陸に送り出した 27 万人の満蒙開拓団は、結果として数多くの「中国残留孤児」を生むこととなった。著者、井出孫六氏は故郷の長野県の開拓団に視点を据えて貧農排除と国防の国策がつくりだした、現在に続く悲劇を追及している。(武器を持たない)庶民にとっての国家とは何か、戦争とは何かを考えさせる事実である。この「五族協和による王道樂土の建設」にかりだされたのは長野県だけではない。満蒙開拓団や青少年義勇軍は、広島県でも結成されている。私たちの身近に、終わりのなき旅を続けている人がいることを改めて思う今回の読書会だった。(参考資料として実態を記録した本や残留孤児の問題をテーマにして小説や絵本等を図書館が用意してくださっていました。)それこそ日本中の至る所から、満州に向かった。直接に戦いをするのではない人たちが、最前線に向けて、国防のための「具」として駆り出されていった。この事実から私たちは何を学びとるのか。しかも異国の人たちにとっては、「大泥棒」としかとらえられなかったこの事実から。

真実を見抜き、真実の声を聴き分けられる「感覚」を研ぎ澄ます時は、今ではないだろうか。新たな「終わりのなき旅」が始まる恐れを感じているのは私だけだろうか。

◆ 1 月課題本 ◆

『岩に立つ』

三浦綾子／著 講談社

作者が三浦綾子氏だと見れば、これまでの経験から、基督教の教えに基づく内容だろうと先ず想像する。例会当日図書館が用意してくださった年譜資料(「信仰と文学」より)にも 1952 年受洗とある。クリスチャン作家と言われる人は、はっきりクリスチャンと書かれることが多いが、別に聖職者ではない。一方、仏教徒作家は、殆ど仏教徒だと書かれることは無く、僧侶の場合にたまに表示される。日本の宗教観や意識がそうさせるのだろう。

『岩に立つ』も宗教性があるものという先入観を持って読み始めた。

主人公の鈴木新吉が我が半生を語る内容なので、話し言葉のリズムがあり、まるで講談本で読む江戸っ子のような気っぷの良さも感じられる。するするさらさらと読めた。新吉の仕事は棟梁である。モデルは、三浦綾子氏が「男の中の男」と称えた人物だそうで、仕事人としての腕は確かであり、立派な建物を作られたようである。この作品で棟梁としての生き様は、重要なポイントに違いないが、さらっと読み終わってみると、クリスチャン作家の書く宗教性は、どんなところにあっただのだろうかと考え込んでしまった。たしかに新吉は入信したし、兵隊になっても常にポケットに聖書を入れていたと書かれているから、基督教は登場した。だが、神とも基督教とも読める『岩』に立つ新吉は、いっこうにゆらぐ様子が無い。神に従い、人を

恐れない精神を、「からだを殺しても魂を殺すことの出来ない者どもを恐れるな」というキリストの言葉から得ているのだから、信じたらコワイモノ無しかもしれない。宗教性の強さを描くところなるという1面を見せられた感じがする。だが、宗教性は強いだけではないだろう。『岩』に立っていても、その岩を疑い、立っている自分の足を疑い、立っている根拠を疑い、それでも何か岩となるものにしがみつこうとするのが日常である人は、新吉とは、はるかに遠い。そういう弱さを抱え込んだ人間を描くのも宗教性といえる。そうすれば、さらさらとは読めなくなるが。

ただ、この作者の作品は、人間の弱さを描いても（例えば原罪を描いても）ゆるぎない「岩」をはずすことはないように思う。それで安心するか、眩しくていたたまれないか、それが作品の好き嫌いを分けるようだ。

◆ 2月課題本 ◆

『ひとひらの舟 樋口一葉の生涯』

三枝 和子／著 人文書院

近代日本の幕開けとなる明治時代、女性の作家が何人も登場したのですが、今も真っ先に名前を口にされるのが樋口一葉女史です。それだけに樋口一葉の研究論文や研究書、伝記の数はおびただしく、例えば昨年出版された『なつ』（領家高子 著 平凡社）という作品にあげられた参考文献は59件。『なつ』は一葉の本名ですが、伝記を書くのは並大抵のことではないと感じます。課題本では 樋口一葉は「なつ」と表記されますが、卒業証書が「なつ」、斎藤緑雨は「夏子」と表記します。また、「なつ子」もあります。「那津」というものもあります。

手に取りやすく“おもしろくてためになる”『ちびまる子ちゃんの 樋口一葉』（キャラクター原作 さくらももこ・漫画 高橋由佳利・シナリオ 伊藤智義・監修 森まゆみ）というマンガも「樋口一葉ってどんな人？」という場合の水先案内人になってくれます。マンガですが、それでも参考文献は主なものだけでも20件とか。これも、立派な案内人ですが、一葉女史の残された日記の陰をどう読むかなどということでは、別の何人もの人が案内を試みています。

『ひとひらの舟』は、樋口一葉が明治という時代をどのように受け止め対処して生きたかを大きな流れとして簡潔に描いています。本文が180ページ程のものなので440ページを要した『なつ』に比べると読みやすいと言える

ようです。ページ数の違いは、一葉の歌と日記をどのように扱うかによっての事と言えますが、小説家の日記が、自分の思いのままを書いただけとも言えず、どこまで縁の糸を延ばすかその解釈が多くの評伝の違いになっています。

明治の女性が、書くことで自分を表現するのはどれほど困難だったか想像するのも難しいのですが、1000年前の紫式部以来閉ざされた女性の自己表現の扉を、近代になって初めて開いて進んでいった人です。女性であることを利用もせず、利用もされず、「よのひとハよもしらじかしよの人のしらぬ道をもたどる身なれば(明治28年『水の上日記』)」という強さと矜持が感じられます。

「自分はたとえ世間から一葉崇拜者だとあざ笑われようと、この人に“まことの詩人である”という称号をおくりたい」と言った森鷗外34歳。

「この作品中の文字5・6字ずつを世の中の小説家や批評家たちに文章のうまくなる薬としてのまかせてやりたいものだ」とは、幸田露伴29歳の辞。

島崎藤村(23歳)や、馬場孤蝶(26歳)たち文学サロンとして集まる青年達から称讃され、時を隔てた2004年の新札発行では、5000円札の肖像として選ばれました。

現在、なぜ一葉女史がお札になるほど認められるのか。文才はもちろんですが、明治時代の女性が置かれていた位置から考えると、新しい扉を開いたことが深い意味を持っているでしょう。新札発行当時の塩川正十郎財務相は、学術重視、男女共同参画社会の推進などを観点として発案したということです。

今の文学の世界では、男性であるか女性であるかは全く問題にならないので、一葉女史の新しい扉の開け方は想像しにくくなりました。けれども、新しい世界の扉を開くということの意義は何も変わっていません。

つい先日終わったソチオリンピックで、竹内智香さんが、パラレル大回

転という競技で銀メダルを取り称讃されました。彼女は、「アルペン スノーボード」という殆ど知られなかった世界の扉を、そのパフォーマンスで開いてみせました。そして それは、称讃に値する才能でもあったのです。今は、男女平等で開く新しい世界の扉が沢山有り、スノーボードの竹内さんがお札の肖像になることはないでしょうが。

「よの人のしらぬ道」(樋口一葉の当時で言えば、男性と対等な女性作家の道)をたどる人への称讃を、終わったばかりのオリンピックになぞらえて理解するのです。

一葉女史は“奇跡の14ヶ月”を過ごし、明治29年(1896年)24歳で没しましたが、「一度読んだら捨てられるような作品ではなく、1000年も残るような作品を書きたい」と望んだその思いが、伝記から伝わってきます。

樋口一葉女史の伝記を読んだからには、実際にその作品を読んでみようと思って久しぶりに『たけくらべ』を読みました。登場する子どもたちのなんと新鮮なこと。教科書で読んだかなと言われる方には、是非再読を、とおすすめします。

それでも、読みやすいとは言えないので、耳と目で読むのが得策です。例会日には、幸田弘子さんの朗読テープの一部を聞かせてもらいましたが、文体のリズミカルなことがよくわかり、理解しながら心地よく読め(!)しました。テープは、図書館の視聴覚資料ということですが、「CDの世の中で、テープなんて聞く器械が無いわ」という声もあり、資料収集にも時の流れがあるのだなと思いました。しかし、明治の文豪の作品はもう古典だと言われても、朗読してもらおうと解りやすいのは確かでしょう。朗読する側にまわるのも良いことです。

図書館が所蔵している一葉女史の日記の実物写真全集や復刻版にもおめにかかり、図書館で行う読書会の醍醐味を満喫しました。



樋口一葉の生涯 を、書かれている。5000円札にも載っているが、25歳で死んでしまう。貧乏な生活の中で執筆の意欲は死の間際まで消えなかった。ぜひ皆様も教室に参加され、他の方の感想を聞くのも楽しいと思います。



読書会に参加して、樋口一葉のすばらしさを教えていただきました。雪の日、半井桃水と2人で汁粉を食べるシーンが好きです。なつ(一葉)のときめく恋心に、ちょっとせつなくなります。清らかな小説を書いた一葉がもっと長生きしていたら、どんな小説を書いたのか……と思い、若くして亡くなったことがおしいなあと思いました。



樋口一葉の一生です。壮絶。あらためて、『たけくらべ』を読んできたいと思いました。それにしても、女性としての生き方、尊敬に値します。

◆ 3 月課題本 ◆

『白き瓶』

藤沢周平／著 文芸春秋

作者の藤沢周平は、武家物、市井物、芸道物など多くの作品を書いているが、時代小説として評価される面が際立っている。映画化の影響があるのかもしれない。その人が、今回の課題本では、「小説 長塚節」なのだ。何故、長塚節なの？ と話題になったが、二人は似ているという点がいくつか挙がった。解説の清水房雄氏がこの作品のおもしろさについて、「ほねのおれるおもしろさ」と書いて居られるが本当に読み進むのはほねがおれた。「膨大な資料を綿密に検証」(伊藤桂一氏)してあるそうで、検証数 63 部と紹介されている。詳しくて「長塚 節について知りたいことはすべてこの作品にある(井上 靖氏)」と言わしめた作品だ。

575 ページにも及ぶ長編である。伊藤左千夫が、三井甲之との論争にうんざりしたと洩らすように、子規の下に集まった明治の歌人たちが、「馬酔木」に寄り、「アカネ」に寄り「アララギ」に寄っていく間に、感情をもつらせて歌論を戦わせる件は、読み手としてはいささかうんざりした。こういう経緯があってそれぞれの流れができたのかと、細かい歴史はよくわかったが、その部分の説明が何とも長いのだ。しかし、教科書的知識では、長塚 節と伊藤左千夫の肌合いの違いなどわかってはいなかったのだから、うんざりしながらでもそれぞれの違いに目を引っ張られて読んだ。長塚 節が主人公の小説なのではあるが、伊藤左千夫が生き生きとして感じられる。ど

ちらかというと小心で、几帳面で、堅苦しい節に対して、左千夫は、いかがわしく、傍若無人で、すぐに噛みつき、あまり人を傷つけたという意識が無い困ったお人という人物のようだが物語的魅力がある。左千夫は、弟子の斎藤茂吉たちにも疎まれるようになったらしく、“すべて幽けき寂滅の光”(作者がこの章を「ほろびの光」と名付けた所以であろう)の辺りの描写が心にしみた。左千夫が、49歳の夏、脳溢血であっけなく歌詠みの群れから消えたことは、なんとなく力の落ちる気分だった。節も37歳で結核死する。共に、大気圏に突入する星の燃焼を連想した。その光芒は、今も地球を廻っている。

藤沢周平は、歌人達の論争や同人誌に採られる歌の評などを克明に描きながら、日本の近代文学が、「露骨なる描写」(田山花袋)を叱呼した自然主義全盛の数年の後、耽美主義や理想主義などに移行していく様子を描いていく。明治末期、自然主義の窮屈さや陰鬱感からの解放を示す潮流の変化があった。その短歌観の相違を、手紙など人格的な食い違いとして縫っていくのが今回の藤沢手法だから作品が長編になった。大旅行家でもあった長塚 節の旅の記述を追うのも時間を要する。

作品の題になっている白埴の瓶は、有名とされる長塚 節の次の短歌から採られている。

〈白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり〉

この短歌を参加者みんなでリライトしてみれば、白い瓶にどんな雰囲気を感じ、どんな気持ちを託したか一幅の想像絵を共同制作したようになるだろうと考えて試みた。

その場で、すぐにリライトしてそれを集め、司会者が誰の文かもわからずに読み上げて、それを聞きあうのだが、ホーと言ったり、シーンとなったりして、一人ではできない経験をした。時間をかけないで取り組んだリライトだったので、推敲をしないままの粗い文ではあっても、共通して出てきた雰

囲気が解って、おもしろい遊びだった。

読書会には、このような楽しみ方もある。



白埴の瓶こそよけれ霧ながら 朝はつめたき水くみにけり

長塚節は、正岡子規にもっともその才能を愛された歌人であった。同時に名作と評される『土』を遺した作家でもある。一家の長男としてその枠の中から飛び出すこともできず、旅と歌作にその身を捧げ、37歳という短い生涯を終えた。その長塚節と藤沢周平とは、重なる部分が多分にあるように思える。

藤沢の緻密な資料、文献により完成された初版本。そして、発刊以後発見された書簡等から明らかになったことを加筆したり、訂正されたりしたのが今回の課題本であった。長塚節を小説として著したい藤沢の頑なところは、長塚節とどこか似ていると感じたのは、私だけではないと思った。

612ページの厚みのある文庫本を読むには、正直少々辛かった。また、終始張りつめた生き方をしている登場人物に息苦しさも感じた。ところが、読書会で話してみると「おもしろさ」を感じている人もいたのである。いろいろな感じ方、受け取り方があるからこそ読書会がおもしろいのである。これが読書会の楽しさにほかならない。

今回は、「しんどさ」を感じる人が多いのではなかろうかと、講師の先生からいつもと違う読書の楽しみ方の提案があった。「リライト」である。上記の短歌をどんな気持ちで、どのような場所で詠んだのかを一人一人のイメージで書いてみた。言葉からイメージの世界をひろげていくのですからなかなかおもしろさがありました。当然そのイメージのバックボーンになって

いるのは、本全体の読み取りである。「白埴は、陶器かな、磁器かな？」
『土』を書き、自分も小作を使っている地主であり農家だから、厚みのある
陶器だと思うなあ。」などつつぶやきながら書いてみた。そんなに時間をか
けることなく作品(?)が出来上がった。

みなさんの作品を講師の先生が読んでくださってのミニ鑑賞会。「白色」
から感じるものや「朝」からイメージすることは、病に侵された身でありなが
ら、新しい今日が始まり、また明日へつながることを詠ったものと感じること
ができた。

リライトすることで、登場人物へ寄り添う新しい「読書」体験ができた3月
の読書会でした。



疲れました。こんなにも面白くない本も久しぶりです。作者は藤沢周平。
流石、彼の面目躍如。カタイ！ 武家物、市井物、武芸物以外はこんな本
になるのです。



リライト

白土で作られた陶器の質素な瓶はなかなか良いものである。土の足をつけて立
つ人生は、時に霧に覆われることもあるが、やがて霧は晴れ、また新しい朝
が来れば、つめたい水をくんで喉をうるおし、明るい1日が始まる。

霧立ちこめた冬の朝、白埴の瓶でつめたい水をくみ、わかして飲むお茶はお
いしいこと。今日1日元気ですごせる気がします。

死を目の前にして、霧のたちこめる早朝、故郷の山合いの静かな川に一人立たずみ、今まで生きてきた自分をふり返り、なつかしみながら、自分をいとおしく思い、自分がしたかったことは何だったか、こだわってきたことは何だったか、自分をいとおしみ、この世のすべての物事、自然、人に別れを告げている。

霧は自分自身の身の置き所として捉えている。即ち実際の霧ではなく、自分自身の境遇を表し、うすい白いこわれ易い瓶に、朝に冷え冷えとした空気の中で、水を満たす情景。凜とした静謐な感じがひしひしと伝わる。ピンと張りつめた空気の節自身の状態。もやもやして自分自身を励ます為に、白い薄い瓶に水をくむ。

秋海棠の命を自分の命とみる

家の前を流れる川から霧がたちのぼっている。横に流れて広がる霧の中で、山水をくんでお供えをする。花を活けた白磁の花瓶とも静かな朝の空気を分かち合う。

陶器で造った白い瓶は、紅色の秋海棠とはきわだった組み合わせであり、白堊の瓶こそがその美しさを引き立てるものである。自分がこの組み合わせを選んだことへの迷いもはれた。その朝に流れる川より冷たい水をくむ自分がいる。

寒い霧がたちこめる朝、泉のほとりで冷たい水を白い磁器の瓶がくむ時、なんともよい趣がある。

この花を活ける為の花器は白い色のものが最適と思う。霧が流れている朝まだ早く泉に下りて手をいれると、冷やとする様な水を汲んで瓶に入れましょう。花の色は白を引きたててくれる花でしょう。心も部屋も真新しさで満ちあふれています。

秋の早朝。夜あまり眠れず早起きしてしまい、なんとなく人家のまばらな山を歩いている。昨夜雨が降ったため、山は深い霧におおわれている。まるで雲の中を歩いているような、深い深い白い霧。視界の見えないその先から、ことりの鳴き声がきこえる。ふと水音がする。竹のひしゃくでくんで、それをこぼしたような、静かな水の落ちる音。どこから聞こえるかはわからない。泉？ でも見えない。でもこの辺りには水の出ているところはない。水音は一度きり。とても清らかな水の落ちる音で、耳の中に残っている。あれは誰かがこの深い霧の中から清らかな水をくんだのではないだろうか。霧からくんだその水はどっしりとした肌の荒い白い焼物の瓶に自然にたたえられている。今、私もその水を飲んだ気がする。

白さぎの刈田に遊び瀬戸は風ぎ 人声もなき邑にしあれば
白埴の瓶こそよけれ 故里の
家に傳わる床の間に座し
鶯の谷渡りきく背戸の山
人声もなき 邑にしあれば

三代の御代 生き抜いて 米寿春
桜千里を吾子とドライブ
バンブーの千本桜咲き初むる
子孫のよりて宴たのしむ

米寿なお まめでグランドゴルフする
瀬戸の海風 鶯の声
